活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

株式会社ダイセキ

ねらい

限られた資源を活かして使う「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として事業活動を進める。

学習者の状況

資源循環型社会の構築のために必要な情報への理解度には差がある。

成果指標

限られた資源を活かして使う「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として、事業活動ができたか。

■取組の内容（事業活動）

1　社員に対する環境教育の実施
- 月１回のコンプライアンス研修
- 階層別研修

2　環境保全の実施
- リサイクル事業
- 大気・水質環境の保全
- 災害･事故に伴う緊急工事

工夫

- 持続可能な社会の構築に向けた会社の経営戦略の実現のために社員を人的資本と捉えて、積極的な研修を実施。
- 様々な研修等の機会を捉えて、社員の環境に対する意識を高めるように工夫。

見通しOK　成果実感

- 廃油・廃液・汚泥、汚染土壌・石膏ボード等を燃料や原料等にリサイクルし、限られた資源を有効活用。
- 排出水には環境法令で定められる基準値よりも厳しい自社基準を設定し、環境負荷を低減。
- 災害・事故などによって漏えいした油や、火事発生後の消火剤などを回収し、拡散を防止して、災害・事故の復旧を実施。

見通しOK　成果実感

社員の反応

- 研修で勉強した内容を、今後の自身のキャリアアップにつなげていけるようにしたいと思います。（中堅社員）
- サーキュラーエコノミーなどについて､地球環境や社会のために､行っていく必要があることを理解しました。（管理部門社員）

中堅社員に対する研修の様子

- 社員一丸となってリサイクルに取り組む姿勢が､工場などからも高く評価されている。
- 特に災害時対応については、自治体などからの信頼につながっている。

東日本大震災時の復旧支援の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動と環境との関係について理解を深めることで、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成につなげることができた。

- 廃棄物を資源と捉え、多様な技術を組み合わせることで再資源化を行い、排出者と利用者をつなぐ役割を担っている。

■取組の内容（社外への環境学習）

1　工場見学の実施

工夫

- 様々な団体や地域住民等に対し、工場見学を実施することで、事業活動に伴う環境負荷低減に関する取組を周知。
- どんなことをやっているのか、においや色など、現場を五感で体験。
- 見学者からの意見は全社で共有するとともに、工場等の現場にも反映することで業務改善を実施。

本物体験　成果実感

参加者や社員の反応

- 工場のイメージとは異なり、きれいな施設等であることが分かり､環境に配慮していることが分かった。(参加者)
- 地域の人に自分たちが誇りを持って仕事をしていることを知ってもらえる機会だと思っている。（社員）

環境への取り組みの紹介の様子

工場見学の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動を理解してもらうことで、廃棄物に対するネガティブなイメージを払拭し、資源の有効活用に向けた周知ができた。

2　各主体へのセミナーの実施

・環境学を学んでいる大学生・大学院生を中心に、環境ビジネスに関するセミナーを実施。

・セミナーでは、工場見学も取り入れ、事業者が実施している取組への理解を深めるよう工夫。

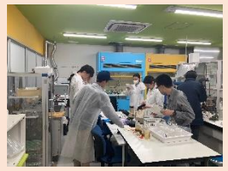
・大学プログラムへ参画し、長期インターンシップも受入。長期インターンシップでは、大学生・大学院生に対し、工場見学やリサイクル体験を通じ環境保護とビジネスの両立をするための思考ができるよう工夫。

本物体験　共感・納得

・企業や環境を支えている現場を見ることができて、そこで働く方々がかっこいいと感じた。（大学３年生）

・学生でありながら事業展開について考え、実際に取り組める可能性があるということについて大変嬉しく思います。（大学院生）

大学生を対象としたセミナーの様子



長期インターンシップでの実験風景

・事業者の強みを活かしたセミナーや工場見学により、大学生等への環境ビジネスの理解を深めることができた。

・長期インターンシップの受入を通じ、社員が学生に対し最新の科学的知見に触れる機会を提供することで、意見交換を行うなど、学び合うことができた。

■株式会社ダイセキ

・1945（昭和 20）年創業、1958（昭和 33）年名古屋市に会社を設立。

・設立当初から、時代に先駆け廃棄物を資源として再利用することに着眼し、焼却処理施設や最終処分場を有しない産業廃棄物の中間処理・リサイクルのパイオニアとして業界をリードしている。

リサイクル工場の様子

社会の中での役割

学習者の変容

【社員】

・環境問題に対しさらに関心を持つようになった。具体的な取組のために、何が必要か考えるようになった。

・普段の業務がどのように環境を良くすることにつながっているかを意識するようになった。

【見学者、参加者】

・環境問題への取り組みについて、より身近に感じるとともに、関心を寄せるようになった。

【長期インターンシップ参加者】

・環境問題を解決するためには技術的側面だけでなく経済性や社会とのつながりの側面も重要であることを理解できるようになった。

成果と課題

【成果】

・事業活動と環境との関係について理解を深め、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成を進めることで、循環型社会の構築を推進することができた。

・セミナーや工場見学により、環境への理解を促すことで、持続可能な社会の発展に貢献することができた。

【課題等】

・社員への環境教育のさらなる充実

・より幅広いステークホルダーへの情報発信、業界イメージの向上に向けた取組